



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	ESD特集号を発行するにあたって(特集：持続可能な開発のための教育)(fulltext)
Author(s)	原子,栄一郎
Citation	環境教育学研究:東京学芸大学環境教育実践施設研究報告(17): 1-2
Issue Date	2008-03-20
URL	http://hdl.handle.net/2309/88912
Publisher	東京学芸大学環境教育実践施設
Rights	

ESD 特集号を発行するにあたって

今回、『環境教育学研究』で初めて「持続可能な開発のための教育（education for sustainable development、以下 ESD と略す）」の特集号を組むことになり、4 編の論文が寄せられた。ESD の動向と可能性を論じた最後の論文を除いて、他の 3 編は、議論が始まったばかりの教育現場での ESD 実践に一筋の光明を投じる論文である。

さて主題の ESD であるが、1999 年の末に中央環境審議会から出された答申によると、これからの環境教育・環境学習は、「環境のための教育・学習」という枠から「持続可能な社会の実現のための教育・学習」にまで広げてとらえられるべきであり、その対象には、環境だけでなく、社会、経済などを初めとする幅広い分野と内容が包含されるべきだと述べられている。日本の環境教育政策の基本的な方向性を示すこの答申を踏まえるならば、自然保護教育、公害教育、野外教育、新教育運動などに淵源を持つ環境教育は、今日、「持続可能な社会の実現のための教育・学習」すなわち ESD の段階にあると言える。視野を日本から国際に広げると、この ESD は、2002 年の国連総会本会議での採択を受けて、「国連持続可能な開発のための教育の 10 年（2005 年～2014 年、以下 ESD の 10 年と略す）」という国際的な共同取組みとして、今日、推進されている。

このような文脈の中にある ESD とどのように向き合うか？

ESD の 10 年が制定されたことを受けて、ユネスコは「ESD の 10 年・国際実施計画」を策定し、その後、各国においては ESD の 10 年実施計画が作成されている。日本は、2006 年に関係省庁連絡会議よって実施計画が発表され、そこには様々な施策や具体的な事業が書き込まれている。実施計画策定に続く現在は、計画の進捗状況をモニタリングし評価する指標開発の段階にある。アジア太平洋地域においては、2007 年に、指標開発のガイドラインがユネスコ・バンコク事務所から出された。

今、一瞥したように、ESD は国際的・国内的な政策課題として公式化され、制度化され、また指標を通して標準化もされている。

視点を変えて、ESD にかかわる幾つかの概念に目を留めてみよう。まず「持

持続可能な開発（以下、SD と略す）」である。この名称の下に、幾つかの異なった考え方が含まれている。一つは、これからもさらに量的拡大を図る〈持続可能な成長〉。二つには、経済成長と環境保全ならびに社会的公正のバランスを図る〈弱い SD〉。三つには、環境限界内で経済的厚生と社会的公正の実現を図る〈強い SD〉。四つにはそもそもの開発主義からの脱却を図る〈脱 SD〉。

次に「ESD」である。一つは SD について学び、知識・技能・価値・態度を身につける〈SD についての教育〉。二つには、現状に照らし合わせてより sustainable であるとはどういうことかを考えながら、現状を変えるために学ぶ〈SD のための教育〉。三つには、複雑で不確定な事象である SD に鑑みて、自己反省的・創造的に、参加、協力、連携によって学び続ける〈SD としての教育〉。

もう一つ「指標」に注目しよう。一つの考え方は、評価項目と到達目標を設定し、その目標がどれだけ達成されたかを数値化して計量する〈量的指標〉。二つには、取組みの文脈と過程を考慮し、当事者の思いを共感的に理解する〈質的目安〉。三つには、一回的な出来事である教育の営みでは指標や目安を予め設定することができないので、当事者が語る体験を聞き取る〈物語〉。

これら 3 つの概念、すなわち「SD」、「ESD」、「指標」は、それぞれいくつかの考え方を内に含んだ幅のある概念である。

持続可能な成長—弱い SD—強い SD—脱 SD

SD についての教育—SD のための教育—SD としての教育

量的指標—質的目安—物語

このような幅を持つ 3 つの概念を重ね合わせて見てみると、3 つの概念を貫き通している基軸となる「価値」を見て取ることができるように思う。一方の左の極には、これまでとのつながりを重んじる「連続」を、もう一方の右の極には、これまでとのつながりを断ち切る「非連続」を。

先に投げかけた ESD とどのように向き合うかという問いは、端的に言えば、今までのようにこれからも続けていくか、それとも今までを断ち切って新たにこれからを始めるか、という問いと言えるのではないだろうか。この特集号が、そのような問いを考える素材にもなれば幸いである。

(原子栄一郎、第 17 号責任編集者)